

巻頭言

死と再生

三原正資

遠くに建設中のブリジストン・ビルをのぞむ、東京駅にあるデパート7Fの喫茶店でハーブティーを味わっているとき、女性の声が入った。

「幸せになるって言うけど、その人だって、さいごは病気で死ぬじゃない。その人ったら、頭の中は宗教で固まっていて、強引で、命令調で……。私、そういうの嫌いな、宗教だなぁって。私にね、雑誌くれたの。そしたら、終活の話ばかり書いてあるの」

会話の中で、二、三の新宗教系の教団名があがっていた。話のところどころに、「ご住職があ……」とか「ご住職が教えて下さって」ということばが入る。その女性は必ずしも「お寺」に否定的ではなく、あるいは、会話の相手の年配の男性は、「ご住職」だったのかもしれない。

「私、そういうの嫌いな、宗教だなぁって」という声を聞きながら、私は非宗教的なマインドフルネスやヨガが人々に受け入れられるわけだと思った。そのとき、ちょうど、刊行されたばかりの『あの世』と「この世」のあいだ たましいのふるさとを探して』（谷川ゆに 新潮新書 二〇一八）を読んでいた。

江戸時代の国学者・平田篤胤を研究した谷川さんは、日本各地の「たましいのふるさと」を訪れ、その感想を次のように述べている。

率直にいった私は、土地に宿る神々や、自然の景観に還っていった先祖の魂と少しでも身体的な連なりのある人々が心からうらやましい。その渴乏感、自分の全身の皮膚が裂け、すべて裏返しになってしまいうまくなくらいに切実なものです。

いやいや、現代日本にだって宗教はあるし、仏教や神道由来の行事も頻繁に行われている、そういう施設もたくさんある、それにあなたにも先祖の墓はあるでしょう、それを大事にすれば何も問題ないじゃないですか。そう言われるかもしれませんが。(略)

しかしその一方で、それを支えるべき「信仰」というものが、ほんらい頭で理解するものではなく、ある種の身体的な強い実感に根差すものだとなれば、現在あるいずれか特定の宗教に、そのような理屈を大きく超えたりアリティをはつきりと持つことが、私自身には到底できないのです。

ところで、谷川さんのいう「理屈を大きく超えたりアリティ」とは、宗教学者ルドルフ・オットーが『聖なるもの』(一九一七)で明かした「ヌミノーゼの体験」といわれるものはなからうか。

心理学者河合隼雄氏は『こころの読書教室』(新潮文庫 二〇一四、岩波書店から二〇〇六年に刊行された『心の扉を開く』を改題)の中で、「ヌミノーゼ」について

それはまさに、自分を越えたものの、「おられます」とか「あります」とか「そうです」とかという体験ですね。しかも、彼の考えでは、そのヌミノーゼ体験は、あらゆる宗教の根本にある。（略）

そして、面白いことを書いていますね。「これが宗教だ！」という体験は、「あまり根源的だから定義ができません」と書いてあるんです。

私が出会った喫茶店の女性、そして民俗学者の谷川さんは、それぞれ、新宗教や既成宗教の教えにリアリティーを持つことができなかった。

ところが谷川さんは、北海道白老町アヨロ海岸にある、アイヌ語でアフルパロ (Afulu parō) に入る路の口) と呼ばれる洞穴を訪れたときの感動を次のように語っている。

古代的には死者の魂の赴く所は同時に生命が出現する源でもありますから、そこに性的な感じがするのはある意味、当然ともいえませんが、とくに北の海辺は人の訪れの少ない分、そのありようがイノセントに残っているようでした。

そして死者はここで再生を待つともいわれており、アフルパロはやはり生と死の連環性が内包された穴だと捉えることもできるでしょう。

谷川さんの記述を読みながら、先日バスで身延山年頭会へ向ったときの風景を思い浮かべた。中央高速道路から中部横断道に入ると、右に八ヶ岳や南アルプスの山々、左に富士外輪

山を仰ぎ、富士川に沿って走り、そして身延川の傍らを身延山に分け入って行く。

宗祖はこのような情景を、身延に参詣した富木常忍に送られた『忘持経事』に的確に描写されている。

峨々たる大山重々として、漫々たる大河多々なり。高山に登れば頭を天に挿ち、幽谷に下れば足雲を踏む。(略) 然る後、深洞に尋ね入りて一庵室を見る。法華読誦の音青天に響き、一乗談義の言山中に聞ゆ。(定遺一一五一頁)

御廟所を拝し、草庵跡にたたずむたびに、私はこの一節を思い浮かべ、身延・鷹取両山に囲まれた「深洞」の意味を考える。

中尾堯先生は『日蓮』(吉川弘文館 二〇〇一)の中で述べている。

このように、「昼は日を見ず、夜は月を拝せず、冬は雪深く、夏は草茂」る(「種種御振舞御書」)谷あいの場所を、隔絶された一つの地域空間としてとらえ、法華経の聖地として位置づけている。

この深洞は、死と再生の場所ではないか。『忘持経事』で、宗祖は常忍に向かって次のように告げる。

教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し、五体を地に投げ、合掌して両眼を開き尊容を拝し、歓喜身に余り心の苦み忽ち息む。我頭は父母の頭、我足は父母の足（略）同時の成仏なり。是の如く観ずる時、無始の業障忽ち消え、心性の妙蓮忽に開き給ふか。

身延山がアンプルパロと同じだと言うわけではないが、谷川さんのことばを借りると、身延山は、死者が再生を待つ、死と生の連関性が内包された場所ではないか。二つの山から下りてくる風に身を包まれながら、私はリアリティを観た。下方の空中から、遙か虚空へと上昇するかのようだった。

山々に響く「法華読誦の音」に身体を開放して、このあと、二月末に京浜教区教化研究会議でお会いしたカール・ベッカー氏（京都大学こころの未来研究センター教授）の提唱するサイコマンティウム（故人との内心対話）の提唱（『愛する者の死とどう向き合うか』晃洋書房 二〇〇九）と比較するとともに、同書の発言を思い浮かべていた。

ハーバード大学などの最近の研究によって、ストレスや抑うつ予防策には、「瞑想」が非常に有効であることが分かってきた。また「瞑想」の中でも、なにも考えないようにする瞑想よりは、唱えごとを繰り返すマントラ（忘我行）こそが、その日に襲ってくる様々なストレスから心身を守ってくれることが証明されつつある。

ここでマントラとは、「ご霊前・お仏壇の前で木魚を叩きながら、お念仏、お題目、般若

---

---

心経など声に出して繰り返して唱える」ことだが、その目的がたんに瞑想、マインドフルネスのためかどうかは、第五十一回中央教化研究会議でも討議された。そして、この「なにも考えないようにする瞑想」よりは唱題読誦行の方が効果的という検証があるなら、結構なことである。

なお、それはそれとして、今回、私たちは仏教の修行の根底を形成する「止」と「観」（サマタとヴィパッサナー）の理論と実践の一端を探ろうとした。そこで得たことを日常の行学に生かしていただくことを念願している。その上で、自然との一体性、人々との連なりのある身体性から生まれるリアリティのある宗教の実践をめざしていただきたい。

ところで、富士川を離れ身延山に分け入るとき、小湊から太平洋に沿い、清澄山に入っていく光景を想った。

まもなく、宗祖降誕八〇〇年を迎える。